



情報ネットワークの進展と大学図書館

図書館情報大学教授 原 田 勝

ただ今ご紹介いただきました原田でございます。

今日のテーマは情報ネットワークの進展と大学図書館ということでございますので、大体これに沿ってお話しさせていただきます。

大学図書館の現在を見てみますと、どういう段階にあるかと言いますと、目録システムの機械化が終わり、OPACを導入するところも増え、そしてILLシステムの稼働によって、いわゆる学術情報センター主導といってもよい、そういう図書館の機械化が一段落した段階ではなかるうかと思えます。もちろん、そうした方向のコンピュータ化も必要な訳ですけれども、日本の大学図書館の外では、特にアメリカなどにおきましては、急激な変化が起こっております。代表的なものをあげますと、マルチメディアであるとか、電子図書館またはデジタルライブラリーであるとか、ネットワークの利用であるとか、あるいはアメリカの National Information Infrastructure、あるいはケーブルテレビと電話、データ通信といった別々の業界の境が段々無くなって来つつあるということとか、色々と急激な変化が起こっておりまして、後で少し触れます、WAISの開発者でありまして、今はWAIS Inc. という会社におります、ブリュスター・カールという人は、“興奮するような時代である”、と言っておられます。それはどういうことかと言いますと、近い将来情報伝達の方法というのが大きく変化する、その予兆を感じて、皆がそのために一生懸命働いている、というような時代である、と言っておられます。

今日のお話しの中身は、大体ネットワーク利用の

増加ということについてまずお話をさせていただきまして、それから電子図書館の試みについて若干お話しをさせていただきます。個々の例は先程の長尾先生の議会図書館のお話しにもありましたし、この後の谷口先生のお話しにも出てくると思えますので、簡単にお話しするだけにしたいと思います。それから、日本の大学図書館というのは、先程申し上げましたように、これで一段落がついたところでありませけれども、今後どういうふうに整備して行く計画があるのかということにつきまして、学術審議会の報告を中心に若干ご説明いたします。そして最後に情報流通の将来、現在進みつつある色々な計画が実現するとどういう情報流通というのが考えられるかということについて最後にお話ししたいと思えます。

まず、ネットワーク利用の増加でございますけれども、先程長尾先生がご紹介されました『情報の科学と技術』の(平成6年)1月号、まだ出て半月位ですけれども、それにインターネットの特集というのがございます。そこに掲載されております論文をご覧になると、どういう状況になりつつあるかということがわかると思えます。インターネットというのはアメリカのアーパネットというのを基盤にして発展して来まして、それが大きく変化したのが、NSF ネットという米国科学財団のネットワークにバックボーンを取り替えた時で、そこから最近の急速な拡大が進んだと考えられます。そこには200万台のホストがぶら下がっておりまして、世界中で1500万人のユーザーがいると言われております。どういうことをやっているかと言いますと、基本的な

機能としましては電子メール、ファイル転送、リモートログイン——と言いますのは、遠隔にありますコンピュータを利用することでございますけれども——、この三つが基本でありまして、この基本機能をどう使うかによって色々なことが出来ます。もちろんそれにマルチメディアを使えるようにするか、あるいはテレコンファレンスの機能とかが付け加わって、現在の図書館の業務、あるいは研究者の情報流通の業務を考えた場合に、これで満たすことのできるニーズというのは非常に大きな範囲におよぶ訳であります。

ただし、インターネットを通してどういう情報が手に入るかと言うようなことは、後で具体的な例も出てくると思いますけれども、一番の問題は何かと申しますと、現在は、アナーキーと形容する人がいますけれども、まさにそのような状況であります。あちこちに色々な情報源がございまして、それをどうやって探していいかわからない、どこにどういう情報があるかということ是非常に苦労して探さなければいけない、という状況にあります。色々なことを試行錯誤を繰り返しながら行わなければ、本当に目指す情報が見つからないというような状況にあります。情報をもっと簡単に探すようにできる、どこにどういう情報資源があるということをやまく知ることができる、そういうシステムがこれからは非常に重要になるのではないかと思います。

もちろん、そのための試みというのものも、いくつかありまして、例えば有名なソフトウェアといたしまして、Archieという（これはArchiveという言葉から作られた名称であります）ファイル名を入れると、そのファイルを持ったサイトを教えてくれる、というようなソフトがあります。それから先程お話しいたしました、ブリュスター・カールという人が開発しまして、その後色々な企業の資金を得て改良を加えまして、現在は独立のWAIS Inc. という会社が扱っているWAIS（これはWide Area Information Serverの略です）があります。これは何かと言いますと、キーワードの自動切り出しを行いまして、ある情報を持っている情報源をキーワードによって探すことができる、そういうシステムであります。現在どういう方向にあるかと言いますと、これを日本語化する試みが行われております。この会社自体はサーバー用のプログラムを更新して行く、改良して行くために作られた会社でありまして、クライアント用のプログラムは無料、サーバー用はお

金を出して買って、そこに情報を入れてサービスするという、そういう計画であります。日本語化されたものも同様な形でサーバー用は有料で、クライアント用は無料でダウンロードして使えるというようなことになるという計画で進められている、と聞いております。

それから次に、Gopherというもう一つの別の、階層型メニューに基づく情報検索システムとでも言った方がよろしいのではないかと思いますけれども、そういうソフトウェアがあります。アメリカ人は、Gopherというところは何処で生まれたか大体わかるようでございます。開発したのはミネソタ大学なんですけれども、Gopherというのはミネソタ人に対するニックネームでありまして、ミネソタで開発されたからGopherという名前をつけたということのようであります。もちろん、別の意味付けもありまして、Gopherのpherというのはforと同じで、Go for things、物を求めて訪ねて行くという、ということから付けられた名前であると言う人もおります。

それからもう一つ、これも有名なものですが、WWW (World Wide Web)、あるいはトリプル Wということもあるようですが、これは何かと言いますと、いわゆるハイパーメディアを利用して、あるテーマに関連する文献を探しますと、それが関連のある別の文献につながっている、そういうように、ハイパーテキストの中で色々に関連のある文献をたどって行けるという、一つの検索システムであります。

こういうものももっともっと開発され、さらにもっと優れたものが開発されていきますと、アナーキーな情報資源の分散という状況に対処できるような、だれでも簡単に、欲しい情報がどこにあるかということを見つけられるような、そういう段階に到達するのであらうと考えられます。

現在でも、このネットワーク化された情報資源というものは、膨大な量に上りますけれども、その具体的な例は先程の『情報の科学と技術』という雑誌であるとか、あるいはこの後の谷口先生のお話しにも出て来ると思います。図書館などでも、例えばCARL Uncoverを利用するとか、色々な話をお聞きになったことはおありだと思います。

こういう状況に対しまして図書館でどういうことが必要かと申しますと、現在は、先程の長尾先生のお話しにもございましたように、外国から日本を見

た場合、せいぜい電子メールが送られて来るだけで、何も取る情報がないという状況で、現在は日本側が情報をもたらすだけであります。もちろん、今はまだ、ある意味ではインフォーマルな進み方をして来ましたので、それで許されているというところがある訳ですけれども、当然のことながら一方的な流通、片側通行だけが続いて行きますと、利用を制限しようとか、あるいは有料にしようかという問題が出て来るかもしれません。こちらからも提供して、お互いに情報を利用できるという状況になっていけばそんな話は出て来ないはずですが、一方的な流通が続けばそういう状況になるということも考えておかなければいけないということです。

そのために何が必要かと言いますと、アメリカの例を見ますと、公共図書館ですと、目録情報のような伝統的な情報に加えて、コミュニティ情報の提供なども行われるようになっていきますし、大学図書館では、大学のカタログとか、カリキュラムとか、あるいは大学のディレクトリであるとか、色々な情報が入手出来るようになっていきます。つまり、伝統的資料だけでなく、もっと広い視野での情報資源の組織化、整備ということを考えて、そういう状況に対処しなければいけないということでもあります。

そして、新しいツールがこれからも出て来るかも知れませんが、現在のところ、まだまだ情報資源があっても、どこにどういう資源があるか、どこにどういう情報があるかを見つけるのが非常に困難な状況になっております。ですから、情報資源ガイドといえますか、そういうものを揃えなければいけない、整備して行かなければいけないと思います。

それから更に人の問題といたしましては、ネットワーク化された情報資源、分散している情報資源の中から最適の情報を探し出す能力を磨いて行かなければならない、ということが、このネットワーク利用の増加という現象だけを見ても図書館で必要なこととして考えられるのではないかと思います。

次に、そういうネットワーク利用の増加と並びまして、あちこちで電子図書館という言葉が、特に去年の後半から今年にかけて、聞かれるようになりました。そのきっかけというのは、ゴア副大統領がまだ上院議員の時に情報スーパーハイウェイという構想を出しまして、その初期の論文の中に、デジタルライブラリーというのが入っていたことによります。情報スーパーハイウェイと言いますと、回線を引いて交換機を入れてつなげば、それで情報

スーパーハイウェイだというふうに、特に我が国では思われていた訳ですけれども、これは何だということになりまして、電子図書館あるいはデジタルライブラリーというようなところにも、目が向いた結果でございます。

電子図書館というのは何かと言いますと、具体的な例は後で谷口先生のお話しの中に出て来ますが、例えばグループウェアあるいはCSCW (Computer Supported Cooperative Work、コンピュータ支援協同作業) システムというのがございます。これと電子図書館とはどこが違うかと言いますと、そんなに違わない、全く同じ部分があります。要素技術に分解して見ますと、重なりと言うのが非常に大きいわけで、そういった要素技術のどれを取り出して、どう組み合わせるか、どういう機能に重点を置くか、そういう組み替え、統合の視点が異なるだけでありまして、他の色々な技術と共通する部分は非常に大きいものであると思います。ですけれども、基本的な機能はどれも持っています。マルチメディアの場合はどちらかと言うと、通信というのはとりあえず考えずに、スタンドアロンのシステムが現在は多いと思われまますけれども、これからはそこに止まらずに、やはり通信も入って来ると思います。そうしますと、こういうCSCWとか、マルチメディア、電子図書館といったものは、結局どういう視点で、どういうユーザーのために、どういう機能を重視して、どう組み上げるかという、そういう違いだけになってしましまして、他の色々な技術と重なる部分は多くなる訳であります。

そういう実際の電子図書館の試みといたしましては、例えば先程の議会図書館の例もありますし、論文、あるいは他の記事などを対象としたものとしては、カーネギーメロン大学の例であるとか、あるいはOCLCのインターネット利用についての計画であるとか、そういった色々な例についてはお聞き及びのことと思います。これと並びまして、もう一つ有名なのがコロンビア大学法学大学院のプロジェクトでJANUS (ヤヌス) というのがございます。JANUSというのはご存じのように、片方で去年を見て、片方で今年を見るという双面の神様ですが、この場合のJANUSというのは去年と今年ではなくて、20世紀と21世紀を見ている、そういう壮大なプロジェクトである訳です。これは、70万冊の図書及び、50万枚のマイクロ資料をイメージ情報としてまず作り、それからOCRでコード化をするという、イメー

ジとコード化情報の二つを持ちまして、コード化情報の方を検索に使うという計画でございます。

電子図書館に関する研究は我々も4年前からやっております。具体的には関西文化学術研究都市に、国会図書館の関西館ができるとしたら、どういう機能を持つ図書館が考えられるか、将来の図書館というものはどうあるべきか、というようなことを研究するというのが出発点になりました。最近色々な省庁で電子図書館をやろうということで、いくつかの計画が動き始めましたが、基本的な、その元となる蓄積は全く無いところからやっております。

実際に図書館ではこういう電子図書館の動きに対応しまして、どういうことが必要かと言いますと、全ての大学図書館で電子図書館を作り始めたら、何千億円あっても足りませんので、いくつかのところで電子化プロジェクトと言うものを策定いたしまして、それを実際に推進して行く、そういうことが大事になるのではないかと思います。この後にお話しいたします、学術審議会の報告でもそういうことに触れられると予想されます。

もう一つそれと並んで大事なことは、電子図書館を操作し、それを利用者のために活用してあげられる、あるいは利用者が活用しやすいようなシステムにする、そういう専門家を養成するということが必要となってくるのではないかと、ということです。

こういう世の中の動きの中で、では日本の大学図書館というのは、どういう状況にあるかということでございますけれども、先程簡単にお話ししましたように、学術審議会の中には学術情報部会というのがございまして、それが平成4年7月の学術審議会の報告を承けまして、大学図書館の機能の強化、高度化の推進について、というテーマで議論をして参りました。実はその部会報告はまとまっておりますけれど、本日学術審議会の会合で報告が行われまして、それから発表されるということになると思われまますので、大筋だけについてふれたいと思います。いくつかのポイントをお話ししますと、大学図書館といっても機械化の問題だけでなく、生涯教育の問題とか、外国人留学生の増加の問題、それへの対応の問題というような、色々なことがある訳です。

大学図書館というのは、日本全体を考えますと、学術情報システムと言った中に位置付けられる訳でありますけれども、それがこれからの高度情報化、4、5年前にイメージされていたこととは、全然異なるとは言いませんけれども、かなり予測よりは早

いスピードで動くと思われる情報ネットワーク化、という事態に対応して、どういうことをすればよいか、どこまで行けるかというのは別の問題ですけれども、途中の、ある意味ではつなぎみたいな感じもあるわけです。大学図書館というものは、例えば図書館と情報処理センターの協力がもっと必要になって来るであろうとか、それからILLシステムというのは、現在のような使い方の良いのかとか、本館だけでなく、もちろん実際には色々なやり方が行われていることは確かでありますけれども、例えば分館を受付窓口にすることは出来ないであろうか、あるいは電子図書館につきましては、いくつかの先進的な図書館における経験、例えばCD-ROMの遠隔アクセスとか、そういった経験はある訳ですけれども、いくつかの大学図書館などで、電子図書館の実験を進めるべきではないか、というような提言がなされております。後は、そういった新しい変化に対応した職員の研修、教育とか、そういう問題について機能強化のための提言というものが含まれております。

ただし、今申し上げましたように、こういう大学図書館を取り巻く状況というものは、最近急激に変化いたしまして、これは私の印象では、やはりつなぎ的な印象を受けるわけでありまして、世の中は急激に進んでいきましたので、それに対応しまして、次期の部会、しばらく後に発足すると思われまますけれども、その検討課題というのは、多分、確定した訳ではありませんけれども、ネットワークと、情報資源の充実がどの程度含まれることになるかわかりませんが、そういったものになると予想されております。こういう状況で大学図書館というのは、最初に申し上げましたWAISのブリュスター・カールさんの言うのと同じように、興奮させるような時代に入りつつあるのかもわかりません。

こういう状況を踏まえまして、それから現在進行中のいくつかの計画を見まして、情報流通というのは将来どういう形になるのだろうか、ということについて若干考えてみたいと思います。ご存じのようにアメリカの全国情報インフラストラクチャー(NII)というのは4つの柱からなっております。まずNRENと呼ばれるものがあります。これには三つの言葉がありまして、NII、情報スーパーハイウェー、それからNRENで、これらは、それぞれ少しづつ違うものです。NRENと言うのは、National Research and Education Networkと呼ばれるもので、高速の回線、バックボーンを引くものです。それからイン

ターネットの現在のバックボーンがそれに替わった時を想像して見ますと、ものすごく大きな可能性があるなということが簡単にわかると思います。

4つの柱の第一番目がNRENでございます。それから、スーパーコンピュータを要所要所に設置して、それを皆が使えるようにしようと言うのが二番目で、それからスーパーコンピュータ用のソフトウェアの開発と教育訓練を行うというのが三番目、四番目にデジタルライブラリー、いわゆる情報資源の電子化と、それにアクセスできるようなシステムの開発であります。こういう4つの柱から成り立っております。

予算的には、政府の支出が一番多いのは、スーパーコンピュータ用ソフトウェア、これも専門家向けだけでなく、低年齢の人でも使えるような使いやすいソフトウェアの開発といったものも含まれている訳でありますけれども、そういうソフトの開発が一番予算が付けられるという計画になっております。皮肉なことに、ゴア構想と呼ばれております、NII、あるいはクリントンーゴアプランと言われたりしますが、それは日本で2015年までに、各家庭に光ファイバーを引くという、そういう計画が影響を与えたと言われております。日本はどういう状況かと言いますと、ゴア構想の影響を受けて、またそれへの対応を考えているというような、おかしな状況にあるというのが、現在であります。もちろん、その中心というのは、回線を引いて交換機を置いて、というのが多くの人のイメージだった訳ですけども、最近では電子図書館といったものも含まれるようになったということは先程お話したとおりでございます。

そのNRENに対応するような国家事業を推進しようという提言は、いくつかの組織から出されております。例えば科学技術会議の政策委員会というところがありますが、そこに研究情報ネットワーク懇談会というものを作られて、そこがそういった提言をしております。それから、社会経済国民会議情報化対策国民会議というところから、やはり高度情報化、NREN対応の、ゴア構想に対応するようなプロジェクトを国家事業として推進すべきである、という提言が出されております。それから、郵政大臣の諮問機関であります、電気通信審議会というところから、やはり同じような提言が出されております。それと並びまして、報告とか提言だけではなくて、具体的に郵政省とか、通産省とか、科学技術庁

といった機関が、単なる通信ネットワークの敷設だけでなく、電子図書館も視野に入れたプロジェクトを推進する、そのための予算を付ける、ということが始まっております。

日本において、B-ISDNというのが、今年初めて、関西文化学術研究都市（略して学研都市と言っております）においてデモ、実験が行われることになっております。B-ISDNというのは何かと申しますと、Broadband ISDNの略です。Narrowband ISDNというものは普通100Mbps以下で、それ以上をBroadbandというふうに区切っているようであります。ブロードバンドになりますと、ハイビジョンの動画を送ることが出来る、それ位のスピードになるものであります。これからの計画ではまず150Mbps、学研都市では150Mbpsで始めて、少し後に600Mbpsの速度でデータを送れるようにするという計画であります。アメリカでは、いわゆるNRENのテストベッドと呼ばれているポイントがいくつかある訳ですけども、そこでは数ギガbpsのスピードで実験が行われておりますし、NRENは最終的には10数ギガbpsのスピードになる可能性もあると言われております。日本におきましては、このB-ISDNの実験を行うための組織として、BBCCという組織が作られました。BBCCとは何かと言いますと、Broadband-ISDN Business Chance Creationというのが最初の名前で、その後にBusiness Chance and Culture Creationと言うように、Cultureという言葉が入りましたが、略称の方は依然としてBBCC、日本語では新世代通信網実験協議会であります。

ここが中心になりまして、今年の秋から学研都市で実験が行われることになっております。その中には大きく二つに別れておりまして、共通アプリケーションと特定アプリケーションとがあります。共通アプリケーションの方は名前の通り全体に共通して必要となる技術の開発を目指したものであります。特定アプリケーションの方は、いくつかの利用分野を限りまして行われることになっております。その一つとして電子図書館というのがございまして、4、5日前の発表によりますと、NTT、関西電力、日立、東芝、富士通という五つの会社が参加して、それぞれ電子図書館の実験を行うという計画になっております。具体的には、9月19日から4週間程、ITU（国際電気通信連合）の総会がありまして、その時に合わせて国際会議場、京都大学、学研都市にありますけいはんなプラザなどで実験が公開されま

す。ただし、まだはっきりしておりませんが、一番中心になるのは、10月4日から8日までテレコムフェアというものがございまして、そのあたりに行くという予定になっています。もちろん、その前にもやらなければいけない可能性は十分高いと言うか、殆どやる予定になっていると言ったほうが良いのでしょうか。この附属図書館でも見られるという計画もあると聞いておりますけれども、その時には、どういうものが電子図書館か、ということを見ていただけるのではないかと考えております。

最後に、こういう状況を前にしまして、図書館はどういうことをしなければいけないのか、あるいは図書館員はどういうことをしなければいけないのか、というような議論は、私が何か言うよりは、むしろ皆さんの、図書館員の世界の中で議論を巻き起こすという、そういうことが必要となって来ると思います。例えば、研究や教育に大きな変化が起こったとすれば、当然大学図書館の役割というものも変化す

るものでありましょう。例えば、現在の出版流通システムというのがすっかり無くなって、つまり出版社から、取次ぎ、書店、図書館とかそういう流れ、経路が全部無くなったら、皆さん方はどうするのですか、というようなことを私の方から問いかけて見たいと思います。もちろん、私は、いつまでたっても図書館というものは、情報源としての役割、あるいはゲートウェイとしての役割、あるいは情報の専門家集団としての役割、その中身は少しずつ変わって行くかもしれませんが、いつまでたってもこれらの役割は残って行くものであろうと考えております。時間が来ましたのでこれで終わらせていただきます。

(本稿は平成6年2月9日に附属図書館AVホールで、「高度情報ネットワーク時代の図書館サービス」というテーマで行なわれた、近畿地区国公立大学図書館協議会シンポジウムでの講演記録である)

お知らせ

夏期休暇中長期貸出を下記の日程で行います

開架図書

7月5日(火)～9月2日(金)

書庫内図書

院生・教職員

6月20日(月)～8月16日(火)

学部学生

7月5日(火)～9月2日(金)

返却日はいずれも

9月17日(土)です。

休館・時間変更等

夏期休業中(7月19日～9月9日)の土曜日は休館いたします。

7月21日(木)～9月9日(金)は開館時間が9:00～17:00となりますので、ご注意ください。

8月5日(金)～8月15日(月)は、図書整理のため、休館いたします。(資料運用掛)

新しい英文利用案内ができました

このたび、従来使用していた附属図書館英文利用

案内に一部分手直しを加えて1994年版を作成しました。附属図書館カウンターに置いてありますので、必要な方はお申し出下さい。

CD-ROMで外国学位論文の検索ができます

このたび1階受付カウンター横にCD-ROM検索専用機を設置し、従来のBooks in Print Plus(米国出版書誌)に加えて、新たにDissertation Abstracts Ondisc(略称DAO)を公開いたしました。これによって、1861年以降1933年までの米国等諸外国の学位論文約100万件が容易に検索できるようになりました。

このDAOの収録内容はDAI(Dissertation Abstracts International)その他の印刷体資料を統合したものですので、何冊もの索引誌を検索する手間がいりません。

検索は、通常のキーワード入力他に、執筆者、研究テーマ等の索引から該当語を選択することによっても行えます。検索の結果、UMI(University Microfilms International)で所蔵のものについては、注文番号も判明しますので複写物の形で迅速な入手も可能となります。また1981年以降のものについては、抄録も付されています。なお5月の提供開始以

来、利用者が集中しております。ご利用の際には、他の利用者のためにも効率よくご利用下さい。

全国共同利用図書資料（大型コレクション）の利用案内について

このたび下記大学図書館より、平成5年度全国共同利用資料（大型コレクション）について利用案内がありましたので、お知らせいたします。

なお、一部内容明細等のある資料につきましては、附属図書館参考コーナーでご参照下さい。

— 記 —

• 東京芸術大学附属図書館

「音楽学学位論文集（Doctoral Dissertations in Musicology）」

• 島根医科大学附属図書館

「解剖学教育ビデオ集成（ビデオテープ）」*内容明細あり

• 茨城大学附属図書館

「近代美術関係新聞記事資料集成（マイクロフィルム）（明治24～昭和16未収録期間あり）」

• 九州芸術工科大学附属図書館

「色彩理論コレクション（A Collection on Color Theory）」*内容明細あり

• 鳴門教育大学附属図書館

「総合イギリス・アメリカ名著復刻叢書（Anglistica/Americana : a selection of works from the fields of literature, philosophy and religion, the social sciences, the pure sciences, language, the arts and technology）」*内容明細あり

（参考調査掛）

報 告

電算機システムの更新について

1 概要

本学の図書館業務電算機システムは、附属図書館閲覧業務システムが昭和59年4月にオフコンで、目録業務・受入業務等についても昭和60年1月に附属図書館へ設置された中型汎用機によって開始されました。このうち、オフコンは現在も稼働中ですが、中型汎用機は平成2年1月に一度更新し、平成6年1月に二度目の更新を行いました。今回の更新では、使用しているソフトウェアについては大きな変更は加えず、主としてハードウェアを増強することによって、利用者サービスの拡大及びデータ量増大への対応を図ることとしました。ホストの主な増強内容としては、処理速度（MIPS値）が2.9から5.2へ、メモリが24MBから60MBへ、ディスク容量が15GBから25GBへ等となっています。さらに、ゲートウェイを設置してUNIXワークステーションからのアクセスを可能とし、端末システムについても台数の増加が行われました。

2 利用者への新規サービス

2.1 OPAC/TSSの充実

従来のコマンド形式による検索方法の他、4月から画面誘導形式による検索が可能となりました。コ

マンド形式と比較すると、検索手段が限定されるため、高度な情報検索に適しているとはいえませんが、マニュアルが無くとも検索することができるのが特徴です。コマンド形式と画面誘導形式は、必要に応じて使い分けることができます。

また、これまで利用できなかったUNIXワークステーションからも、6月からアクセスできるようになりました。これによって、学外からもインターネット経由で利用できるようになりました。ただし、ゲートウェイまでは共通IDで接続できますが、OPAC/TSSを利用するためには利用申請が必要です。利用申請については、附属図書館参考調査掛へ問い合わせてください。

2.2 情報コンセントの設置

附属図書館開架閲覧室の1階に10口、2階に4口、KUINSに接続するための情報コンセントを設置しました。

2.3 検索用携帯端末の貸出

附属図書館参考調査掛のカウンターにおいて、ノートブック型の検索用携帯端末の貸出サービスを4月から開始しました。この端末を、2.2の情報コンセントに接続すると、OPAC/TSSを利用することができます。

3 今後の課題

当面の課題としては、まず、稼働後すでに10年を

経過している閲覧業務システムの更新があります。さらには、OPAC について、土曜開館時における検索の実現を含む利用時間の拡大、インターネットのサーバ上での公開、同時アクセス台数増加時への対処があげられます。

また、将来的課題としては、マルチメディアに対応した、電子図書館システムの実現があります。これについては、今年秋の展示会で予定されているデモンストレーションに向けての取り組みが開始されていますが、このデモシステムと現在の業務システムとの連携が今後の課題になると思われます。

しかしながら、図書館業務システムの基本となるのは、あくまで入力されているデータであって、ハードとソフトは、それを提供するための道具にすぎません。京都大学の所蔵する、膨大で貴重な資料の情報を利用者に提供することが最大の目的であって、それをサポートするのがシステムの課題であることは、いうまでもありません。

附属図書館利用オリエンテーションの開催

附属図書館では、新入生を主な対象とした、図書館利用のためのオリエンテーションを、今年も下記のとおり実施しました。

開催日時と構成

(第一部)

日時：4月19日(火)～21日(木)の3日間

各日11:00-11:40と15:00-15:40の2回

場所：附属図書館3階 AVホール

開催内容：附属図書館の利用について

図書館利用案内ビデオ(約17分)放映

利用方法の説明

1. 貸出・返却・予約・更新等

2. 図書の探索方法

(カード目録とOPACの関係)

3. 二次資料・CD-ROM等の紹介

4. 相互利用とコピーサービス

5. ビデオ・語学テープの利用法

アンケート調査の実施と回収

(第二部)

日時：4月25日(月)～27日(水)の3日間

各日15:00-15:30

場所：附属図書館1階 カウンター前

開催内容：OPAC/ILIS検索について

説明と実演

結果：第一部には3日間で約330名、第二部は同じく約200名の参加がありました。

以下、第一部のアンケート中のコメント欄をもとに、参加者の反応を紹介します。

1) 内容・日程等に関すること

説明については、多くの回答者が「よくわかった」と答えています。

また、主たる対象者は新一回生であったにもかかわらず「4年間利用して知らないことも」あったとの表明もありました。こうしたことから、開催したことは意味があったと判断できます。

なお、実施時間や時期については、授業の登録日程や時間割との重なりを気にした参加者が目立ちました。もっと早める/遅らせてほしいとの意見や、一週間程度の連続開催、項目別に日を分けての開催、あるいはOPAC検索説明も含め一度に集約した開催の希望、ビデオに加え実地見学の要求等の意見が寄せられました。

2) 図書館資料に関すること

こちら、CDや漫画、「もっと通俗的な本」を置いてほしい、あるいは中国書を増やしてほしい等、利用者の非常に多彩な希望が表明されました。

3) OPAC・目録に関するもの

カード目録の分かりにくさも表明されていますが、多くはOPACについてのもので、検索の応答が遅い、変換が悪い、収録対象が少ない等の不満の表明がいくつか見受けられました。

4) 図書館の設備・サービスについて、その他

空調や自転車置き場の改善から、より長時間の開催の希望や、館内端末からの外部接続の実現希望等、図書館の在り方について非常に多様な希望が寄せられてきています。

このように、オリエンテーション日程中の内容についてはもちろん、2)～4)のような図書館の毎日のサービスに関することについても多くの要望が寄せられました。こうした要望や注文は、図書館に対する期待の表明であると考えられますので、利用者の皆さんにとってさらに便利な図書館となるよう検討していきます。

第二部は、初めてオンライン目録検索をする人のための説明会として、カウンター前の検索端末8台を使って実施しました。

期間中はOPACの説明担当者、検索補助者、操作説明用パネルの操作者の計10名で実施にあたり、進行はOPACの概要説明、和書、洋書、和雑誌、

洋雑誌の検索の順に行い、時間の都合で昨年同様、検索の実演はすべて書名/人名キーワードで行いました。

参加希望者が開始15分程前から端末前に着席し始め、開始時間には60名程の参加がありました。OPACについては第一部のアンケートにおいても多くの要望がでていましたが、やはり多くの利用者がオンラ

イン検索の方法について関心を寄せているようです。時間の制約と、機器数が少ないということから、連日先着8人の方にしか検索の実演の機会を提供できず、十分な説明ができませんでした。これらは次年度の課題として検討していきます。

(参考調査掛)

資料紹介

平成5年度に購入しました特別図書、学生用図書（高額図書）を紹介します。

特別図書

平成5（1993）年度

番号	資料名・巻数・年	出版社(国)	備付部局
1	現代佛教学術叢刊 1-100	大乘文化出版社 (台北)	文学部
2	Ethnic and Racial Studies. Vol. 1-14 [1978-1991] (民族・人種の研究)	Routledge & Kegan Paul (英)	〃
3	Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland. (ドイツにおける東洋諸語写本目録) Bd. 14 I, II: Persische Handschriften. (ペルシャ語写本) Bd. 17 Reihe A, I, II. Reihe B, I, II: Arabische Handschriften. (アラビア語写本)	Steiner (独)	〃
4	帝国教育 昭和13年1月-昭和22年3月 「帝国教育」復刻版刊行委員会編 711-810号 復刻版 [1992]	雄松堂出版	教育学部
5	Studies in Moral, Political, and Legal Philosophy. (SMPLP) (プリンストン大学 道徳哲学・政治哲学・法哲学研究叢書)	Princeton Univ. Pr.(米)	大学院人間・ 環境学研究科
6	Cambridge Texts in the History of Political Thought. (ケンブリッジ大学 政治史・政治理論研究叢書)	Cambridge Univ. Pr.(米)	〃
7	Journal of Policy Analysis and Management. Vol. 1-6 [1981-1987]	John Wiley & Sons (米)	〃
8	National Reporter System. Bankruptcy Reporter. (全米判例体系) Vol. 147 ⁺ etc. 40 Vols. [1992]	West Pub. (米)	法学部
9	Study of Monopoly Power / Comp. by B.D. Reams. (独占力の研究: アメリカ 議会調査報告) 12 Vols. [1990] (リプリント)	W.S. Hein (米)	〃
10	British Documents on Foreign Affairs. Part 2, Series 1: The Paris Peace Conference of 1919 / Ed. by M.L. Dockrill. (英国外務省 機密外交資料) 15 Vols. [1991]	U.P.A. (米)	〃
11	地方美軍政資料集 (地方現代史資料集 第1集) 韓国慶南大学極東研究所編 全3巻 [1993]	景仁文化社 (韓国)	経済学部

12	Scottish Studies : The Journal of the School of Scottish Studies University of Edinburgh. (エジンバラ大学のスコットランド研究史) Vol. 1-29 [1957-1989]	Univ. of Edinburgh (英)	経済学部
13	国際取引契約書式集：英和对訳 I, II 4巻 [1992]	国際事業開発	〃
14	Collected Works of Josiah Tucker. New introd. by Jeffrey Stern. (ジョシア・タッカー全集) 6 Vols. [1993]	Routledge (英)	〃
15	I. B. Z. : International Bibliographie der Zeitschriftenliteratur. (国際学術雑誌記事索引) Vol. 28. [1992]	Felix Dietrich Verlag (独)	附属図書館
16	Book Review Index. Annual Cumulations / Edited by Barbara Beach. 1989-1992. 4 Vols. (書評総索引)	Gale Research (米)	〃
17	論文集内容細目総覧 1. 記念論文集 全2巻. [1993]	日外アソシエーツ	〃
18	雑誌索引 : 戦前雑誌記事索引 全4巻 [1994]	大空社	〃
19	全国各種団体名鑑 1993年版 上、中、下 全3巻 [1993]	シバ	〃
20	Encyclopedia of Adolescence. Vol. 1, 2 2 Vols. [1991]	Garland Pub., Inc. (米)	〃

学生用図書 (高額図書)

平成5 (1993) 年度

区分	分野	資料名	備付部局
継続図書	複数分野 社会科学 自然科学	<ul style="list-style-type: none"> • Bibliographic Guide to Government Publications. • OECD Publications. • 国際連合・国際機関及び主要国統計 • 有価証券報告書総覧 (第1部上場) • Sadtler Spectra : Infrared Grating. Infrared Prism. 	附属図書館 経済学部 附属図書館 経済学部 附属図書館
単年度購入図書	自然科学	<ul style="list-style-type: none"> • Both Pearson's Handbook, 2nd ed. & Atlas. (Pearson's Handbook of Crystallographic Data for Intermetallic Phases, 2nd ed. Vol. 1-4. & Atlas of Crystal Structure Types for Intermetallic Phases. Vol. 1-4.) 8 Vols. [1991] (金属間化合物および無機固体化合物の平衡状態図と結晶構造についてのハンドブック) • Pediatric Cardiology. Vol. 9-13 [1988-1992] • Pragus Studies in Mathematical Linguistics. Vol. 1-9 [1966-1989] (プラハ数理言語学研究報 / チェコスロバキア科学アカデミー刊) 	附属図書館 〃 〃
追加配当購入図書	自然分野	<ul style="list-style-type: none"> • SCOPE. (Scientific Committee on Problems of the Environment) Vol. 22, 27-50 [1984-1993] (環境問題に関するICSUレポート) • 海外研究開発レポート (農業問題) Data No. HTR-1916 (11), (13), (15), (22), (24), (29), (31), (32), (36) - (39) 	附属図書館 〃

平成 5 (1993) 年度 蔵書統計

平成 6 (1994) 年 3 月 3 1 日現在

部 局	受 入 冊 数 (冊)			蔵 書 冊 数 (冊)		
	和 書	洋 書	合 計	和 書	洋 書	合 計
附属図書館	4,003	1,876	5,879	489,823	254,832	744,655
総合人間学部	2,972	2,705	5,677	289,778	250,745	540,523
文学部	7,143	4,351	11,494	446,440	291,240	737,680
教育学部	1,921	1,442	3,363	64,589	50,344	114,933
法学部	3,478	5,290	8,768	224,710	303,370	528,080
経済学部	4,978	2,754	7,732	201,516	196,983	398,499
理学部	626	1,883	2,509	42,992	194,417	237,409
医学部	1,472	2,293	3,765	41,158	102,401	143,559
医学部附属病院	0	6	6	11,743	22,537	34,280
薬学部	179	895	1,074	10,631	26,982	37,613
工学部	2,074	5,018	7,092	132,486	243,181	375,667
農学部	1,207	1,313	2,520	161,086	137,396	298,482
農学部附属農場	0	0	0	586	113	699
農学部附属演習林	141	94	235	9,527	2,716	12,243
化学研究所	75	792	867	7,950	32,826	40,776
人文科学研究所	5,412	3,476	8,888	405,896	62,165	468,061
胸部疾患研究所	1	187	188	1,611	4,547	6,158
原子エネルギー研究所	22	325	347	4,762	12,617	17,379
木質科学研究所	7	114	121	4,902	4,638	9,540
食糧科学研究所	2	255	257	3,730	10,090	13,820
防災研究所	91	420	511	7,759	24,160	31,919
基礎物理学研究所	81	559	640	7,474	64,470	71,944
ウイルス研究所	10	84	94	483	9,580	10,063
経済研究所	773	854	1,627	37,396	30,145	67,541
数理解析研究所	76	724	800	6,132	65,054	71,186
原子炉実験所	5	589	594	13,739	29,126	42,865
霊長類研究所	308	810	1,118	5,225	10,837	16,062
東南アジア研究センター	779	3,177	3,956	16,147	53,870	70,017
大型計算機センター	422	485	907	4,560	9,302	13,862
ヘリオトロン核融合研究センター	1	153	154	902	2,771	3,673
放射線生物研究センター	0	0	0	160	1,354	1,514
環境保全センター	14	109	123	539	737	1,276
情報処理教育センター	0	4	4	224	512	736
超高層電波研究センター	0	33	33	454	2,349	2,803
生態学研究センター	12	119	131	1,528	3,844	5,372
アフリカ地域研究センター	356	380	736	3,523	7,969	11,492
生体医療工学研究センター	1	6	7	214	272	486
医療技術短期大学部	525	80	605	21,856	5,190	27,046
人間・環境学研究科	866	2,165	3,031	1,527	5,231	6,758
経理部	0	0	0	558	0	558
施設部	0	0	0	789	69	858
保健診療所	0	0	0	506	63	569
学生部	0	0	0	295	166	461
合計	40,033	45,820	85,853	2,687,906	2,531,211	5,219,117

注) 受入冊数には、学内の蔵書移動にともなう増減、学外への蔵書移動、および不用決定にともなう減は含まれておりません。

図書館の動き

「鈴鹿本今昔物語集」の修補終わる

平成3年度から行っていた「鈴鹿本今昔物語集」9冊の修補が平成5年度で完了しました。これにより、この修補に伴って同時に作成されたマイクロフィルム等を含め、国文学史の研究に大いに貢献することと思われます。

商議会の開催

平成5年度第3回の附属図書館商議会が、去る3月23日に開催されました。今回は平成7年度概算要求、平成7年度大型コレクション収書計画等が討議されました。

平成6年度調査研究員の委嘱

昨年度に引き続き、附属図書館調査研究員の委嘱が、3月23日の附属図書館商議会において承認されました。

「目録カードによる遡及入力の研究」

大型計算機センター 星野 聰 教授

「学術情報ネットワークの研究」

大型計算機センター 金澤 正憲 助教授

協議会の開催

4月25日、近畿地区国立大学図書館協議会が附属

図書館で開催され、昨年度事業の報告、今年度役員を選出などが行われました。また、6月に開催される全国の協議会総会に向けての討議も行われ、地区として「大学図書館職員の育成について（京都大学提案）」と「諸外国大学図書館との相互協力の促進について（大阪大学提案）」及び、「学術雑誌目次速報データベース（仮称）事業化計画とその後の対応について（大阪大学提案）」を提案することが了承されました。また、「学内LANと図書館情報（仮称）」といったテーマによる、国立大学図書館協議会シンポジウムの開催についても大阪大学から提案することが了承されました。

また、上記会議に引続き、近畿地区国公立大学図書館協議会企画委員会も開催されました。昨年度の事業報告や今年度の役員選出、事業計画についての討議が行われ、研究集会や講演会などについて今後具体案を検討して行くことになりました。

平成6年度目録担当職員システム研修の開催について

平成6年6月13日から17日まで標記の研修会が附属図書館で開催され、学内の部局図書室から11名の受講者がありました。

目 次

<巻頭記事>

情報ネットワークの進展と大学図書館……………1

<お知らせ>

夏期休暇中長期貸出を行います……………6

休館・時間変更等……………6

新しい英文利用案内ができました……………6

CD-ROMで外国学位論文の検索ができます……………6

全国共同利用図書資料（大型コレクション）の

利用案内について……………7

<報告>

電算機システムの更新について……………7

図書館利用オリエンテーションの開催……………8

<資料紹介>

平成5年度に購入した特別図書

学生用図書（高額図書）を紹介します……………9

<図書館の動き>

「鈴鹿本今昔物語集」の修補終わる……………12

商議会の開催……………12

平成6年度調査研究員の委嘱……………12

協議会の開催……………12

平成6年度目録担当職員システム研修の

開催について……………12

<その他>

平成5年度蔵書統計……………11

後 記

図書館の世界にもマルチメディア、インターネットといった言葉が飛び交っておりますが、附属図書館でも今年の秋には、吉田松陰を中心とした維新展の開催と並行してマルチメディアによる、いわば電子版維新展とでも称するプロジェクトを実施するため、着々と準備を進めております。詳細は次号でお

知らせする予定です。

もちろん、図書館は新しい世の中の動きに対応するだけでなく、伝統的な資料の保存管理といった役割も持っております。昨年12月に行われた展示会「京洛出版の軌跡」に関連した講演記録も特別号として発行する予定です。（も）